意見交換の概要
（平成 29 年 6 月 9 日（金）・久万高原町役場）

１．消防団女性団員の活動について

現在、私たち消防団員女性団員は 89 名である。最初に女性が入団したのは平成 14 年、62 名であった。その後さまざまな訓練などを行い、現在は主にＡＥＤなどを使った救命講習をやっている。昨年度は、我々女性団員が関わったもので年間 168 回、延べ人数は 525 名と、団員が総出でやっている。現在、指導員の資格を取っている者は 72 名で、平均的には１人が７回出ればこなせるという数ではあるが、なかなか団員の状況によって難しいところもある。大学生消防団員というのもおり、平成 18 年から入っているが、現在 129 名。こちらのほうもさまざまな得意分野を生かした活動とともに、救命講習にも積極的に資格を取って参加している。消防団活動を通して人とのつながりが深まっており、ハード面は行政の方がしてくださるので、我々消防団員は人と人をつなぐということを念頭に置いて活動をしている。

そんな中で防災教育は、特別な誰かが何かを学習して防災を考えるのではなく、個人ができる防災力を身に付けるということで、みんなで助かる、そういうことを考えながらやっていくものである。そういったことをしながら、誰かの心に寄り添える女性団員でありたいと、そういった思いで活動をしている。中には消防団をよく御存じでない方いらっしゃると思うが、私は今日も制服を着ているが、普段も活動服を着て宣伝をしながら、消防団を理解していただいて、なおかつそこから防災・減災に興味を持っていただく。決して難しいことではなく、誰でもが一人一人が考えるべきことであるというのを、やわらかく伝える立場にあるのではないかと思っている。消防職員ではなく団員だからこそできることがあるのではと、日々私たち頑張っている。

そんな私たちではあるが、仕事や家庭といろいろ事情がありながらの活動であるので、さまざまな災害などをテレビで見たりとか現場を見ると、やっぱり心が折れることもある。そんな私たちに、知事から温かい応援メッセージをいただければと思っている。

【知事】

平成 11 年から松山市長の仕事をいただいたときに、消防関係でいろんな問題があったんですけども、その中で深刻だったのが、消防団の確保でありました。これ全国的に見ても、消防団のなり手がどんどん減ってきている。高齢化が進んでいるということで、減少に歯止めがかからないという現実がありました。そこで当時議論してやろうじゃないかという第１弾が女性消防団員の結成、県下で初めて結成という、62 名か。非常に活発な女性たちが賛同していただいて、スタートを切れた記憶がありますし、何か速やかに太鼓サークルをつくって水軍太鼓、あれ最初のころは拍手はしてたんですけど、技術的にはこれからだなと思ったのが、この前お聞きしたらすごいプロフェッショナル並みの技量になってたんでびっくりしましたけども、そんなのが懐かしく思います。その後、女性消防団員の存在っていうのは、これ県下にも全国にも広がっていって、今日につながっていると思います。

次に団員の確保で考えたのが、機能別消防団でありました。そもそも今のフル回転する消防団という呼びかけをすると敷居が高くなってしまうんで、機能を限定して活躍をいただくというふうなことであるならば、ハードルが低くなるんじゃないかということが、そもそものスタートだったんですが、実はこの機能別消防団の全国第１号は松山市でございます。松山西郵便局の職員さんが、意気に感じて結成をしてくれました。機能が限定されてますから、ここの機能はですね、郵便局さんっていうのは、郵便局員さんっていうのはバイクや自転車で外回りしますから、大規模災害時における情報収集部隊としてですね、訓練を積んでいただくというふうなことで、第１

号がここに誕生しました。

次に目を付けたのが学生たちであります。学生たち、松山市には、常時多くの大学生、短大生、専門学校生がいますんで、学生たち、松山市常時学生、専門学校生が２万二、三千人いますんで、これは大会が中心でありましたけども、結成に至ることになりました。これも実は全国で初めての試みだったんですが、彼らの役割は学生ならではの役割で、例えば外国人、大規模災害時に外国人に対応するための組織として機能していただく。それから、避難所が設営されたときのサポート役として機能していただく。こういった緊急時における、大規模災害時の緊急時における部隊としてですね、訓練を積み重ねていただくということで、大学生の機能別消防団が誕生しました。

第３弾は企業内消防団の結成でありました。これはちょっと松山市以外ではあんまりそういう現象起こってないと思うんですが、松山市に味酒校区という校区があって、そこはですね、人口どんどん増えている地域だったんですね。２万人ぐらいいるのかな、味酒校区って今。ともかく小学校がプレハブで対応せざるを得ないぐらいですね、子どもも増え、人口も増えてるところだったんですよ。２万人の校区ですよ。そこに味酒分団と称する分団員の消防団が何人いたと思われます、当時。２万人の地域です。そう十八、九名しかいなかったんですよ。どうにもならないですね。そこで、目を付けたのが、その味酒地区には大勢の社員さんがいる企業が幾つかあるんで、その人たちは働いてる時間帯は地域にいるんですね。業種によってはそのビルの中にずっといらっしゃる。例えば、大きなスーパーの総務部とか、あるいは自動車の大きな販売店の整備士さんとか、外回りしないんですね。そこにいるんです。ですから、ここの機能は何かっていうと、勤務時間中にエリアで火災が発生したときは、消火活動をやっていただくというふうな目的をはっきりさせた機能別消防団、企業内消防団というのを、これも全国で初めて結成されました。具体的にいうと、スーパーフジさんとネッツトヨタ瀬戸内さんが、結成をしてくれたのがスタートでありました。実はこの３つ目の企業の消防団については今、今年から全県下にこういうやり方あるよっていうのを呼び掛けてまして、地域によっては、そういった企業が限定した目的で結成していただくっていうふうな動きが、県内で広がっていく可能性が出てきているところであります。

そこで女性の消防団員も、実はどういうところで力を発揮していただけるのかなということを考えていくと、まさに啓発活動は女性消防団員ならではのですね、活動になると個人的には思っておりました。それをしっかりと使命を果たしていただいているということ。さらにはＡＥＤ、これは救命のテクニックでありますから、ＡＥＤあの機械でですね、助かった方って僕の周りでも数名いらっしゃいます。本当に適切な処置、心臓マッサージから機械を使った処置から人工呼吸から適切にできれば、本当に止まっていた心臓が動いたりですね、一時もう死の境をさまよった方々が意識を取り戻して、もうその後健康になるとか、そんな人たちが周りに、僕の周りでも数名いらっしゃいますんで、その現実、技術と、それから技能をですね、伝えていただけるのも、これも女性消防団員には非常にフィットした分野かなというふうに思ってます。ニーズの増えた女性消防団員さんが、そういう自分たちは何ができるんだ。多分もっといろいろあると思うんですね。ですから、女性ならではのこの分野での取組みっていうのを議論する中でですね、また新たにフィールドを広げていっていただきたいと、心から期待をさせていただきたいと思います。

２．障がい者災害時支援バンダナについて

伊予市手をつなぐ育成会では、一昨年から、伊予市の福祉課と共催で、障がい者の福祉制度や、制度の問題など、私たちがどういうふうに子どもを育てていったらいいかということについて、市民の皆さんと一緒に考える学習会を開いている。今年は伊予市の危機管理課の方に来ていただき、災害に備えようというテーマで学習することになっている。皆さん地域でいろいろあるが、私たちは、子どもが障がいを持っていたり、本人が障がいを抱えたりすると、避難をするとき、また避難所でとか、健常な方とはまた違った不安などもあるので、今皆さんに広くアンケートを取ってそういう意見をいただきながら、８月１日に実施するが、そういうことを考えていきたいと思っている。

その中で、いろいろインターネットなどで見ていたら、障がい者の避難のために役に立つバンダナ、障がい者災害時支援バンダナという、越谷市がつくっているものがあった。大きな90cm角ぐらいのバンダナで、四隅にそれぞれ体が不自由ですとか、目が不自由ですとか、支援が必要ですっていうのが印字してあり、自分が必要なところを三角が背中に出るような形で、災害のときなどはそれを首から巻くだけで、ああ、こんな支援が必要なんじゃないかというのが分かるようなものがあり、とてもいいなと思った。愛媛県はイメージカラーもオレンジで目立つ色だし、みきゃんか何かが真ん中にあってかわいらしい、素敵なのができるんじゃないかなと思って、これぜひ県内でそういうのをつくっていただいたらと。布なので三角巾にもなるし、ちょっと肌寒いときには羽織れるし、またかばんの中に入れてもそんな邪魔になるものではないので、できないかなと願っている。今日すぐということではなくて、また御検討いただけたらと思う。

【知事】

バンダナにつきましては、これはよく防災訓練のときなんかでも、何かそういうマークみたいなのを付けるときは、あれもバンダナだったかな。何か視覚障がい者の方のバンダナとか、そういう限定版は見たことがあるんですけども、今お話にあったのは１つのバンダナにいろんな種別の、障がいの種別が書かれていて、自分の種別をしっかりと見極めて、それが表に出るようにするっていうやつですね。それは非常に面白いアイデアだというふうに感じます。特に障がいの種別によって、例えば視覚障がいだったら寄り添いながらどう歩くかとか、後ろからじゃなくて前に出るとか、いろんなテクニックが必要だっていうことを、いろんな研修なんかで見させていただいたんで、これはかなりきめ細かい対応がいるんだろうなというふうに思います。車いすの場合への対応であるとか、それぞれ違ってきますので、そういう意味ではぱっと見て、自分はこういうところをカバーしてほしいと、助けがほしいというメッセージが視覚で訴えられるっていうのは、非常に効果があるのかなというふうに思います。これは本当にやるとするならば、全県のさっきの市町と県の協力方式っていうのが現実的なのかなというふうに思いますし、１つだけ言うとタオルを使ったらいいんじゃないかなと。せっかく愛媛県はタオルの産地ですから、手ぬぐいじゃなくて、どうせだったら県内にそういう産業を活用できるということを考えたら、より面白いかなというふうに思いました。

特にもう１つ言うと、今年国体の後に愛顔あふれるえひめ大会、全国障害者スポーツ大会が開催されます。これはまだまだ皆さんもっと関心持っていただきたいのは、本当にいろんな障がいを抱えられてる方がですね、どれだけ元気なのか、どれだけ可能性を秘めているのか、それを体感できる大会でもあると同時に、また何と言うんですかね、支える価値、思いやり、大会に関わることによって、その重要性というものを体験できる場でもあると思います。今、各大学に協力を依頼しまして、幸いなことに全面的に全てがやりましょうということになりました。なぜならば、愛媛大会には多くのボランティアが必要なんです。選手の移動、まさに防災に近いですよね。

それからサポート、運営。もうボランティアの力がなかったら、とてもではないけど運営できません。延べで６千人以上のボランティアが必要になります。大会参加者が3,300ぐらいですから、その倍ぐらいのボランティアがあって初めて可能になります。学生ボランティアは800人何とかならないかということを想定していたんですが、各大学、専門学校の協力によって現在1,400ぐらいだったかな、はい、誰か正確な数字。1,400か1,600かどっちかだったと思う。ぐらい確保ができました。

（事務局）

1,600。

【知事】

1,600だね。1,600という大変ね、温かい気持ちを示してくれてるんで、ぜひ皆さんにも、開会式に出るのもよし、それから、県下の各市町の会場、13競技ありますので、それにもデモンストレーション競技もありますから、そういうのに参加するのもよし、ともかく関わってみてもらいたいなというふうに思います。やっぱり障がい者の福祉っていうのは、御本人の自立心と親御さん、家族の理解、外に出してあげようという理解。これは当たり前なんですが、実は一番問題なのは社会の関心です。社会の関心が広まれば、障がい者福祉の問題っていうのは、もう７割は解決をするといっても過言ではない。だから、せっかくこういうえひめ大会がある以上はぜひ皆さんも、御自身だけじゃなく周りにも呼び掛けていただけたら幸いに思っておりますので、よろしくお願いいたします。

≪補足説明≫〔保健福祉部〕

障がい者災害時支援バンダナについて、県身体障害者団体連合会に作成を打診したところ、同会において30年度に取り組む方向で検討が進んでいます。（「三浦保」愛基金活用予定）

その他、県では、市町との連携により、災害時に障がい者が必要な支援について意思表示するための「ヘルプカード」や、外見ではわかりにくい障がい者が支援や配慮を得られやすくする「ヘルプマーク」の配布を実施しています。

３．気象予報士としての防災・減災対策について

私は、気象予報士、防災士、消防団の一員として、特に気象防災の啓発活動を行っている。先ほど知事からお話があった防災士の資格が以前取りたくて、自分の地元に相談したら資格を取らせていただき、大変感謝している。愛媛県は、防災メールの発信とかＳＮＳの活用、そして自主防災組織や防災士の育成など、防災対策について特に力を入れているのがすごく目に見える。

私は、気象の専門家ということで気象防災にすごく関心があるが、特に台風とか爆弾低気圧は、何日か前から予想ができるので、最近積極的に防災対策がなされていると思う。ただ、唯一防災で危ないなと思うのがゲリラ豪雨で、これは予測が難しく、特に山間部は難しい。地形もすごく高い山や低い山があったり、気流の関係などでゲリラ豪雨が起こりやすい。特に山間部というのは過疎化が進んでおり、お年寄りの方も多いと。そういうところの防災情報の発信はなかなか難しい面もあるのではないかと思う。ただ、ゲリラ豪雨も、その豪雨がある１時間前からでも予想ができるものである。私は、特に気象防災っていうのは、努力次第で完全に防げるものだと思っている。もちろん、個人の努力次第というところもあるが、特に地震などに比べると、努力すれば防げるものだと思う。

県として山間部の方、特にお年寄りの方に、防災対策としてどのようなことをされているのかをお聞きしたいのと、気象の専門家として私にできることなど御助言いただけたらありがたい。

【知事】

土砂対策、特にゲリラ豪雨についてはですね、今土砂対策っていうのは、全県下でも危険地域はかなりあるんですね。お金さえあれば一気にやりたいんですが、そんなに打ち出の小づちのように財源があるわけではないんで、危険箇所っていうのはともかく調査をして把握してあります。財政の懐具合と相談をしながら優先順位、危険度の判定をして優先順位を定めて、その危険度の高いところから防災工事を実施しているところです。特に土砂の場合、力を発揮するのが砂防ダムですね。こういったところを重視した事業は、毎年ある一定の予算を確保しながら進めてます。

今もう１つ研究してるのが、そもそも土砂災害っていうのはかなり上のほうで最初起こるわけですよね。上のほうで小さな流れができる。それが雪だるまのように膨れ上がって大きな災害が下に来るというところがあると思うんです。ということは、初期段階の一番上のほうで食い止めることができれば、大きくならないんじゃないかっていうふうに思ったんですよ。そうすると上のほうでやるんだったら、規模も小さい設備で済むじゃないかと。今、簡易的な木材を、間伐材を使った簡易型の砂防ダム。これだと１基 200 万ぐらいでできるんで、その実証実験を今やってます。これをね、東・中・南予で全て３カ所で、どれぐらいの効果があるのかっていうのを実際今工事をやって、実証実験をやって、効果があるという確信が持てた場合は一斉にこれを広げていって、ともかく食い止めるっていうことを最優先にした対策を打っていきたいなというふうに思ってます。

それから、もう１つ今悩んでるのがですね、この土砂災害の危険地域、これを指定したいんですよね。ここはもう明らかに危ないから指定させてほしいと。指定さえできればマップをつくったり、それから、避難の事前の手立てができたりするんだけども、実はこれ住民の理解が得られないんですよ、なかなか。なぜかっていうと、危険だって分かってると。でも、指定されたらうちの土地の値段が下がってしまうと。可能性はありますよね。危険地域だから土地の評価が下がってしまうっていうこともあるんで、だから、うちは指定していただかなくて結構やっていう人が本当に多いんですよ。これはもう本当に地道に粘り強くやっていくしかないなと。だから、この点については県の職員も現場で相当頑張ってくれているというふうに思います。

それから、もっと洪水等々で考えると、実はこれもあんまり議論されないんですけども、１次産業の存在っていうのは極めて大きいです。山林が放置されればそれだけ保水能力がなくなりますから洪水も起こりやすくなる。あるいは、田畑ですね、特に水田なんかは、今全国の水田が一斉になくなると勝手に仮定するとですね、全国の水田が全部コンクリートになったとしたならば、どうなるかっていったら大洪水が起こるんですね。単純計算すると、1,200 のダムつくんなかったら収められません。かつ日本で活用されている地下水、この 80％は全て水田、田畑や山林から雨水によって補填されてます。ですから、こういう機能を１次産業がやっているっていうことはあまりにも知られていないんで、実は１次産業っていうのは食の安全という観点だけではなくて、防災という観点からも１次産業っていうのは極めて重要だというふうなことは、多くの方々が知っていただけるといいんではないかなというふうに思っています。

４．少子高齢化に関する若者の視点からの環境づくりについて

少子高齢化に関する将来の担い手である若者のための環境づくりについて。

私は、専門学校に通っており、若者の目線から愛媛県をよりよくするために、クラスで話し合いを行った。愛媛県は、現在、彼氏、彼女いないランキング１位となっており、移住促進で愛媛県に来られる方も高齢者が多く、課題である少子高齢化がますます他県に比べて進んでいるという現状がある。原因を考えたところ、デートスポットや若者が興味を示す観光地が少なく、若者が楽しむことができる環境が少ないからではないか。刺激を求めて外に出ていく人がいるのではないかという意見があがった。そこで若者が楽しむことができる環境づくりとして、３つ提案がある。

まず１つ目に、道後温泉で足湯につかりながら食事を楽しむ温泉カフェを提案する。若者は新しいものが好きなので、新しいスタイルのカフェに人気が出ると思う。２つ目に、松山城についての提案であるが、若者にも松山城の歴史などに興味を持ってもらいたく、道中にクイズを設けて正解すれば天守閣無料といったアドベンチャー的要素を追加すれば、より人が集まるのではないかと思う。最後に、テーマパークやアスレチックなど、若者が興味を持って足を運ぶ場所をつくること。最近の若者はスマートフォンやゲームに夢中になり体を動かさないイメージが強いと思うが、実際は体を動かしたい若者も多くいる。しかし、体育館を開放していても、自分からやってみようという気にはなりにくいので、スポッチャやアスレチックのように、ある程度スポーツを提供してくれる施設があれば気軽に体験でき、行ってみようという動機にもつながる。若者のＳＮＳなどの情報の発信力はすごく、このような若者が集まる環境をつくることで情報を共有し、県内や県外からも愛媛県に集まる若者が増え、経済効果や地域の活性化につながると考える。

これらについて実現可能かどうか検討していただきたく、意見をお聞かせ願いたい。

【知事】

まず若者が楽しむところっていうテーマなんですけども、人間っていうのはやっぱり実は身近にある価値っていうのにね、気付いてないケースがたくさんあると思うんですね。灯台下暗しっていうのは本当にいい言葉だなとよく思うんだけども。例えば、今の視野っていうのは松山市の特定エリアが中心になってるでしょう。もっとね、空間を広げて、例えば、愛媛県というフィールドで見ると、僕が若者だったら幾らでも行きたいとこあるんですよね。例えば、何がいいかな、じゃあ、冬。冬にこれだけ暖かい温暖な地域にもかかわらず、行けるスキー場が３カ所あるわけよね。それ知らないでしょう。１つは西条の石鎚山。１つは小田深山。１つは久万高原、ここ。何がすごいかっていうと、例えば、僕が松山に住んでいて、今日スキーへ行こう、ひらめいたとする。朝７時半から８時に家を出た。10 時にはもうゲレンデにいるんだよ。滑ってカレーでも食って、午後滑って、さあ帰ろう。夕方４時半か５時にはもう家着いてんの。こんなところね、全国探したって絶対ないよ。最近やっとそれに気付いてきた若者が、僕らの時代と違ってスノーボードだけど、少しずつ増え始めてる。そういう冬ひとつとってもそれだけのところがある。

南へ行こう。南へ行くと、そうだな、若者に一番おすすめなのは、例えば、さっきの砥部焼の体験なんかも、これはもう芸術の分野にも入っていきますけども、魅了される人たちもたくさんいるし、オリジナルのものを手づくりでできるなんていうのは、丸１日いても楽しい。

さらに南へ行くと松野町なんか行くと、自然の中でキャニオニングというね、遊び方があるんだね。ここは要は自然の渓谷、花崗岩でできてるところで、花崗岩って軟らかいから水の流れで削られてつるつるの状態になってるんだね。その自然のものを活用して、丸１日かけて渓谷レジャーができるんだね。キャニオニングっていうのはそういう渓谷を使ったレジャーなのね。例えば、滝つぼダイビングとか、崖登りとか、ここが非常にすごいのは、一番上行くと雪輪の滝って

いうのがあるんだよ。それは天然の滑り台です。全長 40m以上あるんです。幅が７ｍぐらいある。登るときはロープで登っていく。器具をヘルメットとかそういうの着けて滑り降りる、とてつもないスピードが出て、滝つぼん中にドバーンと入るわけよね。これ実は３年前に始めたときは年間 1,200 人ぐらいしか来てなかったんだけども、今はもう年間５千人以上来る。その大半が愛媛じゃないんだよ。大阪と中国地方の若者なんだよね。愛媛県の人たちは外ばっかり見ちゃうから知らない。今、実はそのおかげで松野町って人口４千人しかいないけど、株式会社ができて、これを運営する体制が整い、雇用が発生したんだよね。これも日帰りで行けちゃう。ちょっと遠いけど愛南町行くとサンゴの海が広がっていて、そこでさまざまなレジャーもできる。

さらに若者にふさわしいお金のかからないことっていえば登山、トレッキング。さっき言った石鎚登山もあれば、東のほうへ行けば新居浜の別子銅山。銅山の歴史をたどれる非常に歴史を味わいながらトレッキングが楽しめる空間があったりね。いっくらでも紹介してあげる。

一番今世界的にも注目されてるのがしまなみのサイクリング。しまなみ海道のサイクリングコースっていうのは、アメリカのＣＮＮ放送局が選定した世界７大サイクリングコースの１つに選ばれてる、日本で唯一のコース。だから、今あそこ土日行くと、外国人いっぱい来てるんだね。レンタル自転車もあるから、そうお金もかかんない。あるよいっぱい、いろんなとこ。

今のアウトドアだけど、その他にも伝統文化、芸術、いろんなフィールドが愛媛県にあるし、そこに食材の宝庫だから食が加わるわけよね。例えば、手づくりのピザ体験とか、南のほうへ行けば「びやびやがつお」っていうね、そこでしか食べられない食文化があったりですね、非常に探せば幾らでもあるんで、何も全然他の県と、僕は引けを取らないと思ってますから、ぜひ、まず調べて、みんなで愛媛県ってどんなとこがあるんだろうかって１回調べてみてもらえるといいんじゃないかなというふうに感じました。

それから、松山城についてはですね、クイズでっていうのもあるんだけども、今実はモデル的に今やってるのはイングレスを活用したクイズ。イングレスって分かるかな。

（参加者）

分からないです。

【知事】

分からない。グーグルがやってるんだけど、イングレスっていうソフトがあって、それはエリアを決めて、スマホを持って訪ねていくと、そこのあるスポットに来るとクイズが出てくるんだよね。それをクイズを解いて正解するとポイントが付くんだよ。そのある一定のポイントに達すると、そのエリアの中にいて提携したお店の割引が受けられるとかね。そういうシステムになってる。だから、ＧＰＳの位置情報システムとゲームを組み合わせたアプリケーションと思っていただいたらいいと思うんですけど、このイングレスのモデル実証実験を、実は県下で大学生に協力してもらってやってます。専門学校生も来てると思う。ですからね、結構それはスマホをうまく活用することで、人の動きをつくっていくっていうことは可能かなというふうに思ってます。

温泉カフェっていうのは、これもいいアイデアだと思うんだけども、ただ、既に足湯は道後にあって、それから、各旅館にも設置してもらってます。県がやっぱりそういうカフェを運営するっていうのはできないんで、やるとすれば民間になるんだけども、例えば、そうですね、旅館によっては既にそこでもうやってるとこもあるんですよ。大和屋さんなんかはカフェ形式で、その足湯につかりながらコーヒーとか夏場はソフトクリームとか、結構にぎわってますんで、他も展開してくれるといいなというふうに思います。ただ、もう１つ言うとね、せっかく愛媛なんだから、足湯っていうのは結構全国の温泉地でも広がっちゃってるんで、愛媛らしさを今話を聞いて思い浮かんだのはこたつカフェとかね、冬になったら、あそここたつにしてミカンが置いてあるとかね、それで愛媛らしいなというふうに思ったんで、そんなアイデアっていうものを出しながらですね、仕掛けをしていったらいいんじゃないかなというふうに思います。

テーマパークっていうのは、やっぱりこれ民間の仕事になるんで、これはやっぱり民間の企業

となると、やっぱり周辺エリア人口であるとか、集客につながる動線であるとか、これはまあ鉄道とかバスとか車とか含めてね。そのマーケットが成り立つのかどうか、投資に見合うのかどうかっていう観点からすると、なかなか東京ディズニーランドとかそういうとこまではいかないと思うんだよね。だから、現実問題、今四国にテーマパークっていうのは１カ所だけレオマワールドという、このレオマっていう名前の由来って御存知ですかね。これも何かすごい、僕は聞いただけなんだけど、今あれを当時つくった人は大西さんっていう人なんですよね。レジャー、遊びですね。レジャーは大西に任せいっていうんでレオマというそうなんですけど、これうそじゃないんですよ。ところがそのレオマワールドはどうなったかっていうと、その後やっぱり採算が合わなくて、２度にわたって売却されてる。だから、非常に四国のマーケットでテーマパークっていうのは、なかなか厳しい。北九州が今回スペースワールドを閉鎖するけども、あの北九州の 100 万人の北九州ですらですね、やっぱり維持できないんだよね。岡山のチボリ公園もこうなっちゃたし、だから、テーマパークっていうのは非常にリスクが高いかなという感じがするんで、ちょっとあればそれは越したことないんだけど、現実には難しいのかなっていう気がしますね。

５．アートを活用したまちづくりやそのための人材育成について

知事のお話を聞いて、文化とか芸術は、やっぱりなかなかそこに入り込めないなっていうくらい近々の課題がたくさんあるんだなとあらためて感じた。そうはいってもせっかくのこの場であるので、文化芸術の振興についてちょっとお願いしたい。

私はＮＰＯもやっているが、町中で小さな劇場を運営している。そこを、町の小さなアートセンターにできないかというふうな妄想をずっとこの何年間か持っている。そこに来れば文化や芸術に関するいろんな情報が得られるという。しかし、私たちの力だけでは道は遠いなと考えている。

文化や芸術は、懐が深くて多様な人を受け入れてくれる。文化芸術っていうのは幅が広く、表現することを、人がつくるもの全てが、文化芸術だというふうに考えている。松山市はことばによって創造都市ネットワークに加盟したし、今からは創造都市という新しいまちづくりの概念が大切になってくるんじゃないかと考えている。文化芸術は、特別な人のもの、難しいものと思われがちであるが、そうではなく、人々が日々の営みの中に感動を見いだすことではないかと考えている。その感動とか気付きは、社会にデザインとして生かされていくと考えている。2014 年にスタートした「道後オンセナート」は松山市が実施しているが、温泉にアートを持ってくることで、観光振興に随分役立つという発見があった。アート掛ける、例えば学校であるとか、アート掛ける病院であるとか、アート掛けるまちづくりっていうふうな形で、アートはさまざまなものと組み合わせることが可能ではないか、多様な活用ができるというふうにも思う。そんな魅力的な町になれば、若者の県外流出も多少防げて、逆に愛媛に住みたいという人も増えるのではないか。先ほど知事のお話の中に坊っちゃん劇場のことがあったが、本当に頑張っていらっしゃる。私は松山市でやっているが、それは私たちにとってもうれしい出来事だと考えている。

知事はのんびりアートに触れる機会がないと思うが、アートを活用したまちづくりや、そのための人材育成についてどのようにお考えか、お聞かせいただきたい。

付け加えて、今年の春、県外から３人の演劇関係の移住者がやってきた。松山では演劇関係者としてはなかなか食ってはいけないので、ちゃんと仕事をしてくださいねとお願いすると、１人は農業をする、１人は福祉事業をする、１人は東予市でやはり農業に従事するようになった。

【知事】

文化芸術なんですけども、実はさっき触れていただいたことばのイベントは、市長に就任した翌年に仕掛けたイベントでございます。実は芸術文化の世界っていうのは、そんなに大きなフィールドで共通してできる、トータルでみんなが寄り合うっていうのは県でできるんだけども、実はこれ市町の手腕なんですね。なぜならば、文化芸術、歴史っていうのは、その地域の個性、地域のオリジナルですから、そこでまず磨くっていうことをなくして、発信はできないかなというふうに思います。だから、市長時代の仕事と、今の県の仕事、ちょっと僕今変わってるんですけども、市長のときっていうのはまさに磨く仕事を中心にやってたんで、徹底的にこだわったのがこのことばのイベントと、それから、坂の上の雲のまちづくりだったんですね。ただ、これ全員の興味を引くっていうのはなかなか難しいです。絵が好きな人もいれば、スポーツが好きな人もいれば、演劇が好きな人もいれば、それぞれ強い思いを持たれてるんで、なかなかこっちをやるとこっちはどうだっていう、必ずそういう議論になってしまうんだけども、ということはよりきめ細かくできる、やっぱり市町がこの文化については、まず第１に磨いてほしいなという気持ちがあります。

例えば、ことばのイベントっていうのは、本当に最初は正岡子規の俳句と夏目漱石の文学、しかもそんなにお金もかかんないということで、これを 21 世紀、世紀末イベントとしてやろうというふうに決めたんですね。そこから先は市民の知恵を借りていろんな事業を起こしてよといって、最初にやったイベントは「あなたが 21 世紀に残したいことば大募集」っていう事業だったんです。くしくも１万２千件の応募が当時ありました。その中から、当時の市長賞に選ばせていただいたのが、「恋し、結婚し、母になったこの街で、おばあちゃんになりたい」という松山市の余戸地区の主婦の方の作品を選ばせていただきました。たまたまその作品を当時の市長室の会議室に掲げていたんですね。そうこうするうち 2003 年に新井満さんという方が松山市を訪れて、僕のとこに来られました。会議室で雑談しているときに新井さんが「市長、このことばいいね」と。「これ、このことばふくらまして音楽を付けたら、素晴らしい曲ができるよ」って言われたんですよ。ちょっと待ってよと、新井さんって芥川賞作家で作曲家でシンガーソングライターだと。だったら言っちゃおうかなと思って、どんな人かよく知らなかったんですね。「新井さん、勝手なこと言ってるけど、そこまで言うんだったらあなたプロなんだから自分でつくってよ」と。「ただでね」って言ったらね、そしたら、うんっと言葉をのみ込んだ後、しょうがないと言い出しっぺやということで「引き受けた」って言ってくれたんですよ。その日の夜徹夜してつくってできた曲が「この街で」という曲なんです。新井さんのいいところはですね、それを自費で全てレコード会社と話をつけて、ポニーキャニオンからＣＤ発売してくれました。１枚売れるごとに１円だったか２円だったか忘れましたけど、松山市に収入にしてあげるよといって、そういう仕組みまで全部つくってくれた方なんですね。僕が何であんなに図々しいこと言えたかっていうと、当時の新井さんはまだ世に知られていなかったんです。ところが翌年、「千の風になって」が大ブレイクして、それをつくった作者になったわけですね。だから、本当に新井さんに今でもお会いすると、「いや、あれ千の風になってが先だったら絶対あんな失礼なこと言ってなかったよね」なんて笑い話するんですけども、今でも県の文化事業で協力してくれてます。

県の文化事業で今どんなことやってるかっていうと「愛顔感動ものがたり」という事業やってます。これはですね、それぞれの人生におけるノンフィクションのエピソードを 800 字以内で送ってくれないかという、こういう新井さんと僕が飲みながらこんなのやったらいいねっていうことでひらめいて実現、県の職員がしっかりと支えて実現した事業なんですね。今もう４回目になります。表彰式は２月にやるんですけども、朗読をいたします。今どうなったかっていうと、初年度はですね、１千人の会場でやりました。アンケートを取ったら 99％の方が存続希望。２年目は 1,500 人の来場がありました。３年目の今年の２月が 1,600 人の来場がありました。確かに愛媛県ゆかりの水樹奈々さんにも協力してもらったり、それから、知り合いだった紺野美沙子さん

に朗読してもらったりですね、それなりに魅力的なものにしてるんですが、これは１回見てください。泣きますよ。僕、壇上でぼろっぼろに泣いてますから毎年。また泣いてやがるとか言われてですね。それぐらい真実の話がびっくりするぐらいのストーリーが展開する。だから、来た人はみんなどんなことがあっても存続してほしいと。これはことばの力だと思いますね。

坂の上の雲のまちづくりも最初打ち上げたときは、そんな小説なんかでまちづくり、何を考えてるんだって、いろんな人から言われました。でも、県外であれだけ評価されていて、しかも司馬さんが 10 年の月日を費やして書き上げた明治維新の時代、明治の時代に生きた青春群像ですよね。日本人が初めて日本人という意識を持ち、しかも外国に負けない国をつくろうという希望に燃えた時期に、我々の祖先たちはどんな思いで生きてきたのかっていうのが、あの坂の上のこのメッセージですから、それを体感できる場所はここしかないじゃないかっていうことで、いずれ花が咲くときがくると信じてスタートしました。開花するのには７年かかりました。７年目にＮＨＫがスペシャルドラマで製作することを決めてくれて、そうするとね、空気が一変するんですよ。あんだけみんな、あんなんで何するんだよって言ってたのが、「市長よかったな、わしは最初から分かっとったで」言うてね、それでいいんです。だから、大事なことはそれぞれの地域の文化であるとか歴史であるとか、それはまずは地域の市町の人たち、町民・市民が気付くというところからスタートしないと長続きはしないんじゃないかなっていうふうに思いますんで、ぜひ、それらをまたコーディネートしていきたいなというふうに思います。

もう１点県が新しく始めたのは、スポーツでも力入れているんだけども、若い人たちの芸術的な才能を伸ばしてあげたいんで、昨年から愛媛県の高校生以下を対象にしてこどもの城、砥部町のこどもの城を会場にした子ども芸術祭っていうのを始めてます。やがては全国大会までもっていきたいと思うんですが、これはもう小さく生んで大きく育てるという、そういう観点でこどもの城の、「えひめ愛顔の子ども芸術祭」っていうのがスタートしてますんで、この仕事っていうのはあらゆる分野を同時並行してやっていかなければならないんで、何も芸術に全く無関心とか決してそんなことはなくて、今日はたまたま先ほどは３つのテーマを中心に 30 分しかなかったんでお話しできませんでしたけども、いろんな展開をしているということも知っていただきたいと思いますし、また、演劇ミュージカルは僕もしょっちゅう出てますから、市民ミュージカルも出演してます。「みかん一座」にも出演しました。「みそ汁定食」とかああいう連中の劇団、あれも友達ですから、見に行ってもいますし、その世界も多少は知ってるところもありますんで、ぜひ頑張っていただきたいと思います。

６．グリーンツーリズム、農家民宿経営等について

私は久万高原町のこの山が好きで、この広大な山、空、空気、そこで生きていきたい、生涯を終えたいと思っている。住むためには、何をすべきか。とにかく今は材木も安い、第１次産業、お茶も安い。いろんな文字をどんどん読んでいく中で、グリーンツーリズムという文字を知り、グリーンツーリズムの分厚い資料を読んだら、農家レストラン、農家民宿という言葉があった。ちょっと気になったのは、ドイツで農家民宿というものがすごく進んでいることで、ドイツ人はすごく優秀な国の方で、その国でそういう産業が伸びているというのは面白いなと思った。

私の家は農家なので、農地もあり先祖からの山林もある。また、山仕事に行ったときに、好きな高い山の植物、ホオノキなどを引いてきては自分の家の周りに植えている。毎日そういう自然の中で育っていたので、いつの間にか箱はできていると思い、思い切って空き家を利用して農家民宿を始めた。

あんなところであんなことして誰が来るかというのが前評判であった。私は年を取っており少し気持ちもあったし時間もゆとりもあったので、とにかく来てくれる人のための受け皿をつ

くってあげよう、外に出て行って故郷のない方の故郷、田舎へ行きたいけどどうしたらいいのかという人の宿、そして、都会でストレスのたまっている方の癒やしの宿として、来る人があったら泊まってもらおうかという感じで、本当に軽い気持ちで始めた。野菜は畑でたくさんつくておりスーパーへ行くに及ばない。主に野菜本位の食事を提供し、山の中なので全て予約にした。３日前での予約という形でオープンさせてもらった。

ありがたいことに、少しずつリピーターが増えた。写真を撮ったり、子どもに農林業体験をさせたり、この人大丈夫だろうかというくらい疲れた方が、次の朝顔が違うのでああ、よかったというような方も来られた。農業が嫌いなのではなく、農業を知らなかったという方も来られた。また、素泊まりは食べるものを持ってただ泊まるだけなので料金が安いが、素泊まりの方が来られた時に畑へ連れて行き、畑にいっぱい生えているエンドウやらブロッコリーやらラディッシュやらを「好きなだけ採って食べて」と勧めると、帰ってから農業って素晴らしい、そういう生き方がしたいという手紙がきたりもした。少しでもその人たちのためになったかな、して良かったなと思った。

そして、地域の方が、まさかあそこへ客が来るとは思わなかったのに、横浜や大阪などから来ているのか、自分たちのとこはよそから来てくれるいいところなのだ、と目覚めて、学校やしだれ桜などを利用して地域の祭りを起こすことにした。インターネットで発信する情報を見て、行って住みたいと見に来る方も出た。私たちは旧柳谷村であるが、ものすごい傾斜地だから棚田である。前も石垣、裏も石垣、細い棚田で、石ばっかりあるようなとこで田をつくって難儀しているが、先祖が守ってきたのだからとつくっていたら、何と、よそから来られた方は、その棚田を見て、美しいという表現をしてくれた。それに私たちもあらためて感動した。農家民宿は農業収入の一環だと考えているので、あまり大もうけをしようなんて考えではなく、自分の手の幅に合った感じで山もしながら畑もしながら田んぼもつくりながら、おかみさんもしている、そんな感じである。

また、お客さまに我が家ならではのおもてなしをと思い、茶畑でつくった茶で紅茶をつくることにした。茶葉も本当に低迷しており、最初はキロ２千円とか３千円であったが、今は一番茶でも 500 円、300 円という時代になっている。せっかくきれいな茶畑もあるので、県としては、６次産業、この紅茶なども愛媛として取り入れていただいたらいかがかと思ったりしている。今日の新聞にも新宮のほうのお茶農家さんの記事が出ていて拝見した。今茶農家さんは少ないが、全国紅茶サミットというのが毎年行われており、去年は奈良、今年は水俣、来年は愛媛の開催予定で、サミットのため全国から県に来られるみたいなので、よろしくお願いしたい。

この久万高原全体の地域の掘り起こしを、私たちの知恵の足らないところを県として御教示願えたらと思っている。

【知事】

本当に山には山の島には島の里には里の魅力があると思いますけども、僕もさっき登山やトレッキングの話をしましたけど、山もやりますんで、結構好きなんですが、ただ、石鎚ヒルクライムのレースに出るときだけは、あまりの苦しさに山が嫌いになる瞬間なんですけど。非常に独特の空気の、まあ何と言うんですかね、きれいな空気、それから、夜なんかは久万高原なんか天空にね、満天の星空が広がって、これは松山では絶対見ることのできない風景なんで、そういう魅力は本当にどんどん打ち出したらいいと思います。

なぜならば長い大きな目で見るとですね、20 世紀っていうのは石油という物質を発見したことによって、石油文明の時代と言われていました。そのときっていうのは、ともかくものが豊かになれば幸せになるはずだという、西洋文明の時代と言ってもいいと思うんですけども、ともかくもの、もの、もの、豪華に豪華に、でバブルが発生したというのが 20 世紀だったと思うんです

ね。ところがですね、その行き着く先にあったのは、環境問題の発生とある種のむなしさ、精神的なむなしさというふうなことだったと思うんですね。バブルがはじけた後、人々の好み、価値観は大幅に変わってきて、21 世紀っていうのは環境の世紀であるとか、あるいは西洋文明からものから心へという東洋文明の時代に入ってくると、それが現在だと思うんですね。この大きな視点と、もう１つは日本の地理的な視点。例えば、東京での生活、都会での生活を考えると、隣近所の付き合いはない、コンクリートだらけの世界が待ってる、通勤電車で疲れ果てる、時間的な余裕すらない、スピードが速い。もうちょっと信じられない日常生活がそこには常態化してるんですね。ということは、そのゆがみを是正するところに向かうのが人間の特性だと思いますから、そういう意味で自然であるとか、アウトドアであるとか、こういった芸術文化も含めてですね、こういったところに人々の関心っていうのは確実に向いてくるというふうに思ってます。だからこそ、今その価値、実は山、島、特に島なんか行くと、もう無理だよと、人なんか来やせんしって、そうじゃないんだと。その空間にこそ、例えば、東京の人なんか船に乗る機会すらないわけですね。船に乗るだけで新鮮なんですよね。

これは島の話になりますけども、これも松山市のときに、修学旅行が当時松山すごい少なかったんですね。これを増やそうということで、合併しましたんで島が一緒になったんで、島を活用しようということで、島の皆さんに投げかけました。全国のよさそうな学校、関心ありそうな学校に片っ端から営業活動をかけて、急に来てもらうっていうのは難しいから、広島まで来てる学校を船に乗せて中島に寄らせて松山に泊まってもらうという、そういうプランにしたんですよ。問題はこの中島に行ったときに、心をキャッチできるかどうかだと。当時中島の港で何やったかっていうと、船が、高校生が乗ってる、修学旅行の高校生が乗ってる船が、中島港に入ってきたときに、中島中の幼稚園児が港で待ってくれてます。お姉ちゃんお兄ちゃんいらっしゃーいって旗を振って大歓迎するんですね。上陸した後は、農業体験コースと漁業体験コースに分かれて、最後は砂浜、姫ヶ浜っていうところでバーベキューを食べると。終わると今度また船に乗って、また幼稚園児が来てくれるんですよ。お兄ちゃんお姉ちゃんまた来てねってやったら、もう甲板にいる都会の高校生ぼろっぼろに泣くんですね。本当はあれ多分禁止だと思うんですけど、やっちゃえやっちゃえっていって紙テープ。僕らが子どものころは三津から別府行きの船で大勢の人が船、ドラが鳴って船が離岸しているときに紙テープでこうやって手を振るっていうのが日常の光景だったんですけど、今あれ駄目になっちゃってきたんですよ。中島って小っちゃいから大丈夫でしょうっていってやって、その子どもたちとその高校生が紙テープで結ばれてるわけですよね。それがね、もう一番の感動だって、後でいろんな感想が来ました。これを称して「二十四の瞳・大作戦」というふうに命名したんですけども、本当にそういうね、自然というものの魅力っていうものが伝えられたら人は振り向いてくれる時代に入ったんではなかろうかというふうに思ってます。

そういう中でお茶の話がありましたけども、実はお茶、今日は紅茶をいただいてますけども、愛媛県内におけるお茶の産地といえば、やっぱり今お話があった新宮村なんですね。新宮村っていうのはいろんなチャレンジを繰り返してきて、たまたま平成 13 年だったかな、15 年ほど前にその新宮村の人とテレビで僕の番組に、テレビじゃないラジオの番組にゲストで来てくれたんですよ。そのときに実は新しい商品開発しましたって、番組の中で紹介してもらったのが霧の森大福なんです。僕はね、食べた瞬間ね、これは当たると思ったんです。何だ、この味はと。これはね、いけるからもうどんどん営業かけたほうがいいよと。まずは松山からで、知り合いにちょっと１回食べてみてくれっていって紹介したのが当時のそごう、今の髙島屋ですね。それと三越だったんですよ。そうしたらやっぱり購買担当はね、見抜く力があって、「これはうまい」というんで、髙島屋と三越で取扱いが決まった。その後はやっぱり売れ筋商品になって、インターネット販売にシフトしていくんですけど、今、霧の森大福どうなってるかっていうとですね、必要以上にはつくらないと。売れてもつくらないと。北海道の花畑何たらの道を歩んではならないとい

うことで、今インターネットで注文すると６カ月待ちです。でも殺到するんですよ。６カ月後でいいからともかく予約入れてくれと。それぐらいのものになって、今、今日に至ってるんですね。そうなってくると、そこのお茶というのが脚光を浴びると。かつ県内にはお茶つくってるところ、例えば西条の何だっけ、あの黒いお茶、誰か知らない。何茶だっけ。

（事務局）

黒天狗。

【知事】

黒天狗っていうお茶の栽培をやってるグループがいて、伊予市にはビワ茶をやってるグループがいて、中島町にはあれも何茶だったかな。

（参加者）

べにふうき。

【知事】

そうそう、べにふうきやってるでしょ。そういうふうなところがどんどん出てきてるんですね。だから、それを単体で売るよりは横の連携して、愛媛のお茶イベントとかね、あるいは、何か大きな産業祭りのときに愛媛県内のお茶コーナーとかね、そういうふうなことでメニューを提供、大勢人が集まる場所でメニューを提供することで、人に知ってもらえるというところからやったらどうかなと、今お話聞いてて感じましたね。単体でやるとやっぱり限界があるように思いますから、横の連携ちょっとやってみたらどうかなというふうに思います。それぞれ全然違うところが面白いところだと思いますので、ちょっと提案だけさせていただきたいと思います。

それから、ドイツで多分グリーンツーリズムが広がったのは、1980 年代だったかな。酸性雨の影響でドイツの久万高原みたいな場所がシュヴァルツヴァルトの黒い森っていうとこなんですね。ここがですね、ある日突然一斉に枯れたんですよ。その原因を調べていくと、これは酸性雨だった。そこからドイツ人っていうのはこういうとこありますから、環境問題に非常に関心が高まったんですね。例えば、ごみの分別。それから、交通トランジットシステム。これも車はできるだけ使わないと。ドイツの中央都市なんか行くと、路面電車が非常に充実していて、街中には車は入れないんですね。外、郊外の駅までは車で来て、そこから路面電車に乗り換えて、街中に電車で入ってきてくださいというシステムになってるんですね。100％シャットアウトできないんで、何をやったか、これ日本人では絶対、日本では難しいと思うんですけど、もし車で入ってきてしまったらどうなるか。一方通行だらけにわざとしてるんです。ものすごい不便なんです。しかも市内にやっぱりゼロというわけにはいかないんで、１カ所だけ駐車場があるんですよ。べらぼうに高いんですよ。１回車で中心部に突っ込むと、もうこりごりになるようにわざとそういう政策やってるんですね。だから、これはパークアンドライドというシステムなんですけども、そういうことを繰り返すことによって、自然への回帰現象が起こったんですね。多分、今お話聞いて、その一環の中でグリーンツーリズムっていうのがドイツで急拡大したんじゃないかなというふうに思いましたんで、日本も後追いになりますけども、そういう状況になりつつあるのかなというふうに思いました。

７．空き家の利用について

東温市も、中心の平野部においても、空き家が目立つようになっている。中には３軒、４軒がかたまって空き家になっているところもある。空き家の利用については、全国的に移住促進という面から捉えていろいろやっておるようであるが、愛媛県も情報バンクというものがあって、インターネットで見てみたが、移住・定住促進という面があるからか、バンクの空き家物件、あるいは紹介する物件が非常に少なく、なかなか難しいかなという気がしている。ただ、この物件が少ないのは、土地家屋の所有者が、恐らく、家が空き家になっていてもなかなか売ったり貸したりすることに対して抵抗があり、結果的にそのままにしておくというふうになっているのではないかと思う。ただ、移住であるが、実際問題我々の年、定年退職した後に、県外移住っていうのはなかなか難しいんだろうなという気がしている。昨日か、新聞を見ていると、週休３日制とかいう話も出ており、やはりこれからの仕事スタイル、生活スタイルっていうことになると、時々田舎に行って好きな遊びをしようじゃないかというふうになってくるのではないか、そういう意味では、定住というよりも空き家が借りられたらいいなと、そういう感じがしている。

なぜこんなことを言うかというと、私は昔から釣りが好きで、今はよく三崎半島のほうに釣りに行っているが、行けばなんせ遠いので、１泊車の中で過ごす。そういうことで、昔空き家がないか探してもらったり探したこともあるが、なかなか見つからなかった。今は諦めて車の中で寝泊まりしているが、やっぱりきついので、借りられるようなところがあればいいなと思う。本来は別荘というのが一番いいのだろうが、経済的にもなかなか難しい。

ただ、実際問題この空き家の利用を促進することになると、さっき知事も言われたように、耐震の問題もあるし、管理上のトラブル等の問題も非常にある。考えれば考えるほど難しいのは分かるが、中山間地域においても、あるいは三崎半島の港にもかなり空き家が見える。そういうところが活気づくあるいは元気になる、そういう意味で、空き家を通じて交流でもできたらいいのではないか。釣りに行ったりして、そんなふうに思う。

【知事】

空き家なんですけども、これは実は非常に頭の痛い問題で、例えば、空き家がありました。所有者が貸したいと思った場合に、所有者が自分で資金を捻出して整備をしないと貸せないっていう、ここがネックになって、そんなお金出すまでもないっていうんで放置してしまうという問題が１点と、買いたいっていう場合は逆に今度は買い手のほうが投資をして整備をしなければいけないんで、そこで踏みとどまってしまうという、いろんなハードルがあると思います。後者の場合はですね、実は今県のほうでも市町と協力して、移住者が空き家を改築する場合の助成制度っていうのを立ち上げています。それから、こういう行政のバックアップによって空き家を使っていただく。そのためには県のほうでは移住Ｕターン、Ｉターンの事業いっぱい東京にもコンシェルジュ置いていざなうようにやってますから、空き家の情報っていうのはやっぱり地区、市町が一番持ってると思うんですね。ですから、そことリンクさせて、じゃあ、Ｉターン、Ｕターンのほうは県全体的に力入れてくれと。そこと移住の場合は必ず住む場所、働く場所の問題出てきますから、住む場所については地域ごとに事情が違うんで、基礎自治体である市町がこの事業とリンクさせてコーディネートするという仕組みをやったら効率的になるのかなというふうには思いますので、ぜひ御検討をいただきたいなというふうに思います。

それから、もう１点は、これ例えば長浜町なんかうまくやってるなと思ったんですけど、松山っていうのは非常に住む環境に全国的にも恵まれていると思います。どういう特色があるかっていうと、気候が温暖、雨が少ない、物価が安い、通勤時間が日本一短い、住宅、賃貸住宅の住宅費が日本一安い、余暇時間が日本で２番目に長いとかですね、データ的にもそれは出てるわけで

すね。じゃあ、その松山に来るっていうことは、その松山にさらに近い東温市、さらに近い久万高原、松山にいてもほんとに程近い伊予市、松前、砥部。どうですかってやったら、次のパターンが生まれると思うんですね。直接的な場合もあれば、ちょっとリタイアした人で余裕があったらセカンドハウスというような形で空き家を活用する。これ長浜実はセカンドハウスすごく多くなってます。そういうふうなですね、アプローチもありかなというふうに思いますんで、ちょっと参考になるかどうか分かりませんけども、今後空き家の活用については、愛媛県なんせ多い県なんで、力を入れなければいけないというふうに思ってます。

８．後継者、担い手対策としての移住について

５年前に脱サラして、１年間久万高原の農業公園アグリピアという研修制度でお世話になり、トマトをつくり始めて今年で４年目になる。私たちは移住者というカテゴリーに入れられてしまうが、中山間部の農業者は、どちらかというと、移住者というよりは担い手という形の役目のほうが大きいかなと思う。担い手とは何かっていうと、先ほど知事もおっしゃっていたが、水田が地下水の涵養をしていたりなど、里山を守るということは、思った以上のいろいろな理由があり、それを支えてるのはどんな人なんだろうということ。久万高原町は高齢化率が非常に進んでおり、私の周りでも、70 代ぐらいの方が農業者として今現役で元気に頑張られてるという状況。私は中山間の役員をして今３年目で、５年目までは大丈夫かなと思うが、次の更新の５年目を考えたときは、ちょっとぞっとするような状態であり、70 歳の人があと８年後までリタイアせずに田んぼを守っていけるのかというと、かなりあぶなく、自分としてはすごく難しいなという状況に今なっている。

ちょっと話が寄り道しているが、私が受けた農業公園の研修制度は 17 年間の歴史があり、現在では、トマト部会員の約 20%がその研修制度を受けた卒業生となっている。このアグリピアの卒業生は、高齢化の進む久万高原のそれぞれの集落で、地域の担い手として根付いている。久万高原のトマトは、単価も非常に高く毎年安定しており、丁寧につくれる面積、１人であれば 15ａ、夫婦２人なら 20ａぐらいをちょっと大変ではあるが真面目につくると、もうかるとは言わないが、ちゃんと年金や各種保険とか人並みに払って、サラリーマンとそんなに遜色ないぐらいの収入が得られるという状況である。実際にその 20%がいわゆる農業公園の研修生の卒業生だということを考えても、新規就農者であっても、十分根付いていけるという非常に素晴らしい環境だと考えている。しかも、単純に収入があるだけでなく、職場が、私の家であれば石墨山の麓で 360 度大自然の中にあり、都会と違い集落住民が支え合って生活をしている。最初に、知事から、地域コミュニティの力を高めて少子化・人口減少の問題に対応していくという話もあったが、なんせ人がいないとその共同体も成り立たないので、この人口減少の問題は、より一層早く中山間地域では訪れているという状態である。何とかやっぱり人を呼んでこないといけないというのを、実はみんな気付いていなかった。私が入植して初めて、人が来てくれたほうがいいですか、どうですかという聞き取りを中山間の皆さんにいろいろしにいくと、最初はいやあーっという感じであったのが、次第に、いや、これは呼んでこないといけないというような状況に変わってきて、私の集落では、もう、移住者を呼んでこようと、そういう宣言までしている。

そんな中で、この久万高原のトマトの研修制度は、恵まれた環境でありながらちゃんと収入も得られるということ。田舎で農業したいと思っている人は全国にごまんといると思うが、食べていけないから無理というのがほぼほぼの人の考えで、私自身もそうであった。私自身が調べる中でこの久万高原のトマトに出合ったわけであるが、実は、農業したいけど諦めてるという人は、松山だけでもすごくたくさんいると思う。

この研修制度は、毎年、３人の受け入れ枠で実施しているが、こんなに素晴らしいにもかか

わらず、私のときは10人申し込みがあったものが３人切るときがある。１人、２人という年もある。これはもったいないということもあり、私自身もライフワークとして、こういう恵まれた環境で、楽しい生活を送ってるんだよということをできるだけ発信し、いろんな人がアグリピアの門をたたいてくれるよう活動をしていこうと思っている。県のほうでもサポートをお願いしたい。

【知事】

はい、じゃあ、農業に関してはですね、まず、何でこんなに後継者不足っていう問題がクローズアップされたかっていうと、これはいろんな要素があるんですが、１つには僕が個人的に感じていたのは、長年に培われた携わる方々の共通した体質にも１つ要因があるのかなというふうにずっと感じてたんで、それは最近関係者にはどんどん言ってるんですね。それは何かっていうと、県下の産地を回っていて、これは林業も水産業も農業も、確かにいろんな面で厳しいところがあります。厳しいとこはあるんだけども、実はその中でいろんな知恵や工夫を凝らしてしっかりとした収益を上げられてる方もたくさんいる。いるんですよね。島でもたくさんいました。でも、共通しているのは、もうかってますって絶対言わないんですよ。さっきお話の中でも、いやもっと十分もうかりますからって言っていただきたかったんだけど、「もうかるとは言いませんが」とおっしゃるんで、そこはですね、もうかったときはしっかり収益上がってるんですというメッセージが外に出ていかない限り、関心度っていうのは高まらないと思うんですね。それから、厳しい面は厳しい面で、これはもう何とかしないといけないんですけど、きっちりやられてる方は十分やっていけますよと、収益上がりまっせってどんどん言ったときに、初めて若い人や農業をやってみたいなという人が、あっ、業として成り立つんだなと。やっていける分野、やり方によってはやっていける分野なんだなっていうことが浸透すれば、選択肢に入ってくると思うんですね。それを感じたんで、実は数年前にもうかってますと言い切れる人、大募集ってやったわけですよ。そうしたら、今百何十人が県内の１次産業従事者でいいよって言ってくれて、それを愛媛農林水産人データベースっていうのをつくりました。これインターネットにも上げてます。このすごいところは、私はこういう経緯で農業あるいは林業始めましたと。立ち上がりこういう苦労しましたと。今収益はこうなってますと。１日の生活はこんなですよと。１年間こんなふうに暮らしてますよ。さあ、皆さんいかがですかって、こういうデータなんですね。これインターネット上にも今年から公開してます。そういうメッセージが伝わったときに初めて関心持つ。この方々にはもう１つお願いしてるのは、せっかく県内に農業高校があるわけですよね。講師で行ってくださいと。みんなが学んでるこの分野っていうのは夢があるんだよというところが伝わったら、若い人たちの後継者に結び付くと僕は信じてるんですね。ぜひ、これからはもうかってますというふうなことを言っていただけるような、農業従事者になっていただけたらというふうに思います。

もう１つ、これは女性消防団と同じなんですが、昨年結成、呼びかけて結成したのが、「さくらひめ」という女性農業ガール。彼女たちにもですね、農業はこんなに明るいんだと。こんなに楽しいんだっていうＰＲ役を買って出てほしいということで、今結成を、活躍をしていただいてるところでありまして、要はイメージを変えるっていうのが一番大事だというふうに思ってます。その中で出てきた人たちに対して、やっていただけるんだったらこういう制度がありますよ、充実してますよ。研修がある、軌道に乗るまでは技術指導もします。さっき言った町と組んで、その場合は空き家のほうはちょっとこんなのどうかな、リストありまっせ。こういうのがリンクしてワンストップサービスでできるようになれば、もうかなり状況変わってくるんじゃないかなというふうに信じてます。

もう１つやってることがあったな。あっ、思い出しました。さっき町長にもちょっとお話しさ

せていただいたんですけども、共同集落の人口減少の問題なんですが、この人口減少っていうのは、今全国の市・町で起こっていると。どこ行ってもこの問題っていうのは出るんですが、みんな自治体単位で議論してるんですね。自治体単位で議論するっていうことは、いや、うちの町はこんだけ減ってしまうのか、大変だな、厳しいねって、これで終わりなんですよね。これを回避して違った角度からアプローチしたのが鳥取のあるところなんですけども、ここはまさに共同集落単位で人口減少問題を細切れに考えようという取組みをしたんです。町単位で考えると、何千人、何百人来ないと駄目だねって、もうがくんとなるんですよね。共同集落単位になると１組何とかしようと。１組連れてくれば人口はうちは減らねえぞと。そしたらね、みんなが動き始めて、いろんなつてを使って誰か探すぞっていうエネルギーが集約されてくる。それで人口が減ってない郡部があるんですよ。１個の提案として、この集落単位でこの問題を捉えて目標を共有するっていうことは１つ試みとして、今県の担当者にもこの話進めてほしいっていうことで投げかけてるんですが、町単位でやったらより効果的な、100％それでうまくいくとは言いませんけれども、届く目標、夢みたいな目標やったら絶望しますけど、届く目標だとですね、エネルギーが生まれるんじゃないかなというふうなことでございます。

９．林業の担い手対策としての木材の利用、販売促進について

森林は、本当に大切なこの山の恵みだと思っている。農業だけでなく林業の担い手が本当に不足している。昔は木材単価が良く各林家さんが生活していけたが、今はいろいろ外材が入ってきたり、木材の利用が減ってくるなど、単価が低迷している。それで、林業で飯を食べていくことがちょっと難しくなっている。林業事業体とか公的資金の援助等もあるが、今後この大切な山を保存していくためには担い手が必要である。担い手対策として、ものが売れなかったら単価が上がらない。新しい新築住宅に県産材を使っていただいたら援助しますよといった事業をしていただいているが、愛媛県特区ではないが、民間の工場とか商店とか、いろんなところで木材を使うような努力をしていただき、今、重要文化財等で塗装で耐火性能を有するということもできるようになってきているので、どんどん内装材を使っていただいて、価格安定を図っていただいたら収入が上がり、担い手ができてくると思うので、いろいろ御協力していただきたく、提案する。

【知事】

さて、林業なんですが、愛媛県は僕が就任したときは５年連続でヒノキの生産量が日本一という生産量を誇っていました。残念ながら今２位になっています。スギが 10 位ぐらいですかね、今ね。県土、県の面積の 70％以上が森林ですから、確実に森林県とも言えるわけなんですね。ところがお話があったように、かつてはヒノキも５万円ぐらいしたんですかね。五、六万の時代があったんですかね。ひどいときはもう数千円単位まで下がってですね、これはもう影響は外材との競合ということでありました。今現在はだいたい１万二、三千円ぐらいですかね。もうちょっといってるのかな。

（参加者）

ヒノキで１万５千円。

【知事】

１万５千円ね。

（参加者）

スギで１万１千円目標です。

【知事】

目標にね。だいたい採算ラインが９千円ぐらいだと思いますから、今の値段だと何とかやって

いけるレベルまでは回復してるとは思うんですが、これもまた乱高下しますから、そのあたり大きな課題であります。ただ、僕就任して思ったのはですね、売り方は下手やなと。例えばですよ、全国の人に聞いてもスギって言ったらまずぱっと出てくるのは秋田杉と屋久杉ですよね。これ誰でも知ってるんですね。ヒノキって言ったらまず出てくるのは木曽ヒノキですよね。生産量日本一の愛媛のヒノキっていうのは県内でも知られてない。これはまず名前がないからじゃないかなというふうなことだったんで、就任して直後に木材の関係者と皆さん議論してるときに、規格品については共通の名前を付けましょうよと。例えば、媛すぎとか媛ひのきとか愛媛らしい名前、何でもいいから皆さん考えましょうよと言ったら、いやそれはやりましょうっていうことになって１カ月後に皆さんまた来られて、名前付けることにしました。えっ、どういう名前にしたんですかって言ったら、知事が言った媛すぎ・媛ひのきにしましたっていうから、そのまま使われた、使っていただけることになったんですけども、規格品に対してそういう名前が付けていただくと、僕が外行って売り込むときにアピールしやすいんですね。媛すぎですと。媛ひのきですと。これはだいぶもう５年たったんで、市場関係者の間でも定着をみてきたと思います。

もう１つ問題だったのは、なぜ１位から転落したのか。その現状を分析してほしいということを原課に依頼しましたら、大分とか熊本とか、岡山も含めて高知も含めて、通常今まで愛媛県っていうのは間伐材を切ってたんですが、他の県は主伐、大きな木をどんどん切り始めたと。それで出荷量が急激に上がって愛媛のトップが２位、３位になったんだということでありました。ところがですね、他の県がやってるのをさらに詳しく調べていくと、問題があるということが分かりました。それは切るだけ切って後のこと考えてないと。そうすると山はいずれ死んでしまうんじゃないかと。愛媛県も戦うために主伐をやろうと。ただし、愛媛の場合は主伐をしたらもう１回植える再造林をする。そこに助成制度を付けることによって山を守るという新たな５カ年計画をつくろうと決めたのが林業躍進プロジェクトだったんですね。今、それが少しずつ効いてきて、３位まで落ちていた生産量が２位まできてますけども、生産体制はそれまで川上、川下ばらばらにやっていたのを、当時ですね、それこそ山の関係者、森林組合の関係者、製材所の関係者、市場の関係者、それから住宅関係、設計屋さん、要は川上から川下まで一斉に集まってほしいと。その議論はフリーディスカッションしようと。ともかくメモなしと、ノーペーパーでフリーディスカッションしようって言ったら、意外と横の連携なかったんですね、あの当時。川上から見たら川下はこうだとか、川下から見たら川上こうだって、そこで議論やって、もっとやれやれっていって油注いだんですけど、すごい楽しかったんです。そうすると時間がたつうちに問題点が見えてきたんですね。そこでこれを県行政に生かそうっていうことをやってきている状況で、ですから、そのときにあぶり出された問題点を、それぞれの単位、ああ自分たちの視点だけでは気付かなかったなっていうとこを、ぜひそれぞれが持ち帰って検討してほしいっていうことで、だいぶ連携が進み始めてると思います。

そこへもってきて、もう１つ取り組みたかったのが、新たな技術のＣＬＴをどうするかという。ＣＬＴっていうのは今まで日本は建築基準法があって、木造住宅にはかなり縛りが掛かってます。ところが外国ではですね、このＣＬＴという新しい工法が拡散してまして、日本の木っていうのは縦に合わせていくんですが、クロスに合わせていく。そのことによって強度がものすごい強くなるっていうのが分かりました。今外国では一番高いとこでは 10 階建ての木造ビルまで認められるようになってきてるんですが、いよいよ日本でもこのＣＬＴの技術をですね、法律的に認める段階に入ってきてて、恐らく日本では３階建てぐらいまでは認められる可能性はあります。そうするとですね、中に入れていきますから、見てくれの悪い木材も中に閉じ込められるんで、一気に使える可能性があると。用途も広がるということで、これは何とか生産拠点をというふうには思っていたんですが、今着工に入りましたけど、西条市のほうに新たなＣＬＴ工場、全国で３番目の工場がつくられることになりました。そこはちょっと先行投資みたいなもんなんですけど、必ずその需要は出てくるというふうに思いますし、また僕も先頭に立っていろんな業界に売り込

みかけていきたいというふうに思ってます。

また、もう１つ今アプローチ掛けてるのが、東京オリンピックでは木材を活用したいろんなものを積極的にという声があるんで、いろんなルートで愛媛の木材の使用をお願いしたいということを今やって、まず、その売り先、それから価値をアピールする場というものをつくっていくことが大事なのかなというふうに思ってます。公共施設については、補助制度を付けたりですね、学校は特に木造っていうものを推奨して、やっぱり非常に香りがいいし環境もよくなるんで、これはいろんなところでまた広めていきたいなというふうに思ってます。

最後に僕もそのマーケットが分かんないんで無責任なこと言えないんですけど、ヒノキ風呂ですよね。多分メーカーはあるんだと思うんですけど、例えば、久万製のヒノキ風呂っていうものを、例えば大手の住宅メーカーとタイアップして、これね、ちょっとしたぜいたくなんですね、このヒノキ風呂っていうのがね。そういうマーケットつくれないのかなと、もう既にあるのかもしれないんですが、そんなこともちらっと思い浮かんだりするんですが、素人なりにいろんなアイデアを出しながら、林業の活性化も考えていきたいというふうに思ってます。

10. 子育てサロンのネットワークづくりについて

松前町で子育てサロンを始めて４年目になる。私の住んでいる徳丸というところは、松前町の東の端にある。児童館や子育て支援センター、松前公園に行くには遠く、放課後に子どもたちが安心して楽しく過ごす居場所は近くになかった。また、愛護班に入っていない乳幼児やお母さんたちが集まって、子育ての悩みを話し合ったり、安心して過ごしたりする場所や機会もなかった。そこで地域の子育てを少しでも応援しようと思い、小学生、乳幼児とその保護者を対象に、毎月１回であるが、小学生が集団下校をする水曜日の午後３時から５時まで、集会所でサロンを運営している。年に２回は高齢者や地域の方たちとの交流会を開催し、喜ばれている。

現在はボランティアスタッフに 18 名の登録があるが、交流会のときを除き 40 歳代から 60 歳代の女性スタッフ五、六名で運営をしている。なかなか積極的に活動をしてくれる人材が育たず、また、人材不足もあり、地域の要望はあるものの実施回数を増やすことができない。

そこで県へのお願いであるが、研修会や他の子育てサロンとの情報交換等のために、ネットワークづくりに御尽力をいただきたい。そのことによって、スタッフの質の向上を図ることや、活動内容や運営をより充実させることができると思う。

【知事】

冒頭の話で触れさせていただいたんですが、これから少子高齢化社会を本格的に迎えて、これを乗り越えるためには、本当に地域のコミュニティの力と行政の施策がお互いタイアップしながらやっていかなかったら、もう多分この日本の国っていうのは相当危ない状態になっていくんだろうなと思います。今、日本人の１億２千万人の平均年齢が今 43 歳なんですけども、例えば、今アジアへの売り込みやってて感じるのは、インドネシアが２億４千万人で平均年齢が 29 歳です。ベトナムが９千万人で 28 歳です。フィリピンがやっぱり８千万か９千万で平均年齢が 23 歳です。全てアジアの国はピラミッド型の人口構造になって、昔の日本ですね。それから、まだまだ経済全体の総合力、質は日本のほうが全然上なんですが、エネルギーが違うんですね。だから、今日この会場には若い世代来てますけど、その若い世代の皆さんは、そのエネルギッシュなアジアの世界の人たちと戦っていかなきゃいけない、戦うっていい意味でですよ。大変な時代だと思います。そういうふうな現実がある一方で、国内においては高齢化が進んでますから、じゃあ、それを支えるためにどうすればいいかっていうことを、さっき言ったように財政事情、もう手遅れなぐらい借金しちゃってますから、いずれ絶対限界がくると思うんですね。それを考えると、

逆に言えば地域、東京とかそういうところよりは、まだ地域コミュニティが残っている地域のほうが乗り越えられる力がひょっとしたらあるのかもしれないなというふうなことも最近感じてるんですね。ですから、諦めずにですね、ぜひ地域、地域での取組みを続けていっていただきたいなというふうに思います。

そういう中で、必要な研修であるとかネットワークっていうのは大いに結構なことだと思います。ただ、僕ちょっと分からないのは、この子育てのサロンですね、同じようなやり方をしている団体が町内にあるいは県内にどのぐらいあるんですかね。

（参加者）

松前町には乳幼児対象のサロンが２つあります。そして、私たちのところに１カ所、乳幼児とそれから小学生を対象にした３つあります。県内の状況はなかなか情報として入ってきません。

【知事】

ああそう。

（参加者）

はい。

【知事】

はい、ここで初めて担当部局からの答弁を願います。

（中予地方局健康福祉環境部長）

子育てサロン運営どうもありがとうございます。子育て支援拠点という形で県内で運営している団体が現在 84 団体、かなり増えてきておりまして、そういった意味で、これはいわゆる支援事業という形で実施しているところでございますから、それ以外にも、ボランティアという形で実施されているところも他にもあると思います。それ以上ということになろうかと思います。従いまして、27 年４月からの新制度の導入で増えてきているという状況でございますから、おっしゃるような横のネットワークっていうのは大事だとは思いますが、知事もおっしゃられましたように、それぞれ、例えばＮＰＯ法人運営、あるいは児童館方式、それから保育所方式、市・町直営のセンター方式といろいろたてりやなりわいが違うものですから、今のところはまだそういった横の連携の県全体でのネットワークっていうのはできていないというふうに推測されますが、おっしゃられる趣旨分かりますので、子育て支援課あるいはこれは市町が実施主体でございますので基本的には、松前町のほうにもお伝えをしまして、まずは町内での連携、それから市町間の連携みたいな形で進んでいけばいいのかなというふうに。

【知事】

例えばね、地域によって事情も異なると思うんで、それこそ中予地方局管内のネットワークづくりとかですね、それは非常に近しい関係なんで、ちょっとどれぐらいあるのか調べてみて。

（企画振興部長）

地方局予算。

【知事】

地方局予算で、何かそのネットワークつくるっていうのはそう大きなあれではないから、松山、今日のね、エリアの中でどれぐらい数があるのか、ネットワークすることによってプラスになるのかどうかっていうのを議論してみたらどうなのかなと。

（中予地方局健康福祉環境部長）

はい、もしかしたらそう言われるかなというふうに思いましたが、中予地方局、松山がやっぱり多くて、松山が多くて 30 団体ございます。

【知事】

それは形態はばらばら。

（中予地方局健康福祉環境部長）

ばらばらです。

【知事】

ああ、そこなんだよね。

（中予地方局健康福祉環境部長）

あとが市町それぞれ、割と市町の場合は１つ、２つに集約してやってるところが多ございます。それは恐らく都市型ということだろうと思うんですけども、中予地方局であればその中の連携をした中で、特に中核市以外の施設運営の方にとってはいい勉強になる。

【知事】

多分、いろんな運営形態が一番複雑なのは松山だと思うんですね。だから当初入り口では松山を除く中予局管内でとりあえずやってみて、松山でそれと一緒にできるような団体探していくっていう手もある。ともかくね、よく言ってるように、できない理由を探すよりはどうすればできるかを考える。

（中予地方局健康福祉環境部長）

アドバイス、ありがとうございます。検討してみます。

≪補足説明≫〔中予地方局〕

要望を踏まえ、管内の市町や子育て支援団体等との意見交換や子育て支援グループへのアンケート調査を行った結果、グループ間の交流・情報交換は有意義との意見が多く寄せられました。

このため、中予地方局管内において、グループのネットワーク化による人材育成や活動情報の発信を支援することを検討しています。

11. 食育及び特産品を活用した郷土料理について

今年、愛媛県の食育の推進計画ができ、先日、食生活改善推進協議会の席でいただいた。今後の私たちの健康づくりや東温市の食育に展開し、参考にさせていただきたい。

東温市は、愛顔つなぐえひめ国体のお接待で東温汁を提供することになっているが、これは私たち東温市の組織が立ち上げて創作したものである。今から 13 年前に重信町と川内町が合併した際に、食のほうで何かつくってくれとの依頼を受け、両方の会長と会員で話し合って、川内町と重信町の特産物をコラボしたらいいのではということで、そのころ重信町は河川敷で広大な花火大会と同時に芋炊き会をしていたのにヒントを得、そして川内町のほっちょ鶏という、愛媛県の媛っこ地鶏のもとになったとかいう貴重なものを両方合併記念にということでつくった。名前も、もう東温市になるんだから、とりあえず東温汁ということで出来上がった。それで、毎年、東温市の保育園、幼稚園から高校まで、今の郷土料理として食育で指導している。そういうふうなことで、９日間で１日 900 食のときもあるが、トータルで 4,700 食、各団体と連携して丁重にお接待をとみんな覚悟している。

そして、東温汁と同様、東温市の特産物であるもち麦を生かした第２次の商品として、しぐれを、暫定的にもち麦しぐれというネーミングで、時々バザーなどのイベントに提供している。そういった２次、３次と東温市の特産物を使っていろいろと郷土料理に近いものを製作していきたいと願っている。先ほど知事がおっしゃっていた、坊ちゃん劇場、地域文化の発展とともに、私たちも食のほうの文化でまい進していきたい。

【知事】

食育っていうのは最近やっとね、多くの方々が関心持ち始めていると思うんですが、実は食べ物っていうのは健康に直結しているっていうのは、もう本当に僕は痛いほど感じてまして、昔は暴飲暴食の限りを尽くして、体調を壊した時期もあったんですけども、そのときから自己流なんですけども、本屋で栄養バランスの研究を自力でやりまして、ああ、人間の体ってこういうふう

になってるんだって知りました。それを実践したら、体調がどんどんどんどん良くなって、今ではフルマラソンまで走れるようになるというですね、やっぱり食育って、すごく大事だと思います。特に食育の場合は、男性の場合は最低 1,800kcal 以上、女性の場合は最低 1,400kcal 以上、栄養バランスは主食の御飯と米、主菜の肉か魚、野菜類、乳製品、これをまんべんなく４種類をですね、バランスよく取らないと健康を害すと。しかも１日３食を食べないといけないと。人間の体っていうのは本当よくできてて、１日２食だと３食を前提につくられてる体だから２食しか入んないとためろためろと、熊の冬眠みたいなもんで、ためろためろと脂肪でためろという命令が発せられてしまうんで、脂肪が付きやすくなっちゃうそうですね。ところが３食定期的に入ってくると、ちゃんと栄養が供給されるからためる必要ないという命令が出て、脂肪がつきにくくなるという、こんなことがいっぱい書いてあってですね、食育っていうのは本当これ大事だっていうことは個人的にも感じてますんで、大いにまた広めていただきたいと思います。

それから、東温汁なんですけど、あれ多分芋炊き、僕もう何度も行ったことあるんですけど、あそこの芋炊きは本当おいしいんで、その味を復元するというものなんですかね。

（参加者）

そうです。あれからヒントを得てつくったものでございます。それで、ぜひ今度国体のときに召し上がっていただいたらと思っております。

【知事】

ありがとうございます。ちなみにもうちょっとひねるとですね、東温市の東温汁と書いて（トン汁）ってしたらちょっとしゃれがきくかなと。

（参加者）

それをね、ちょっと東温汁っていうのもあれだから、横文字でっていうことでトーオンっていうことを伸ばして。

【知事】

いや、囲みで東温汁と書いて（トン汁）って書いちゃう。

（参加者）

そうですね。トン汁っていうことになると豚が入ってくるから、鶏だから困るからねっていろいろあったんですよ。今のところあれですが、また、ぴったりするようなネームがありましたら、また御指導くださいませ。

12. ＰＴＡ活動と予算について

私は小学校のＰＴＡの会長をやらせていただき、３年間副会長、会長、幹事ということでお世話になったが、そのときから懸念していた、不思議に思った２つの矛盾がある。

ＰＴＡ会長は年度末に会計監査をするが、例えば、卒業式、会場の壇上の左側にある大きい生花は、学校の予算ではなくＰＴＡの予算から出ている。卒業証書を入れる紙管や生徒が体育館に入ってくるときの赤いじゅうたんもＰＴＡの会費から出ている。県外では紅白まんじゅう、都会のほうでは生徒が胸につけるコサージュも学校行事の卒業式であるにかかわらずＰＴＡの予算から出ている。これはどういうことかと行政にも問い合わせたが、花などは学校に咲いているものを使えばいいだろうというような答えであったり、やれる中でやりなさいと。学校の予算の中には入らないというか予算がないので、ＰＴＡの方どうかお願いしますというような中で、子どもたちのためであればＰＴＡはお金を使うのはやぶさかではないので出すが、まず、これが１つの矛盾。

もう１つの矛盾に感じたのが、新年度になってＰＴＡに入る方に、ＰＴＡって絶対入らないといけないのかと必ず言われる。任意団体ですよと答えるが、よく考えてみたら、全員加入を前提とした、または想定した任意団体。

この２つの矛盾が、この前のニュースを見ていると１つになる。
関西のほうの学校で、ＰＴＡに加入してない親御さんがおられた子どもの卒業式で、お子さんが胸にコサージュをつけてもらえなかった。親御さんが、コサージュの費用は出すから、みんなと一緒につけさせてほしいとお願いしたがＰＴＡに断られ、その子はコサージュなしで卒業式を迎えてしまい、卒業式が終わった後に裁判になって、今係争中だと思う。
私もＰＴＡ離れて５年とはいえ、後任のＰＴＡの人からいろいろ相談を受ける。松山のほうは生徒数が多いので、こういう、ＰＴＡに入らないとか言われる親御さんは多いと思うが、もし知事がＰＴＡの先輩だったとしたら、後輩にどのようなアドバイスをされるか、その辺を、ちょっといい知恵はないかなというようなことをお聞きしたい。

【知事】
まず、ＰＴＡの予算はちょっと僕これ正直言ってどういうふうな現状になってるかは分からないんで教育委員会関係、はい、言ってください。
（中予教育事務所長）
ＰＴＡの予算については、ＰＴＡ会員の皆さんからの出資で賄われております。年間の予算については、その家庭の人数、戸数によって当初の予算が定められて、先ほどお話しいただいたような物品の購入などに充てられていくと、そのように把握しております。
【知事】
それだけ。今の現状に対してはどういうふうに思ってるとかないの。
（中予教育事務所長）
はい、先ほどお話しいただいた現状で、教育委員会の予算の中で支給できるもの、それが全ての子どもたちに支給できるというお話を恐らくいただいたんだと思うんですけれども、行事の中でどこまでの形を整えていくかというのは、やはり学校とＰＴＡとあと市町の教育委員会の話の中で定まっていくんだとは思いますが、その中で子どもが不自由な思いやつらい思いを先ほど聞かせていただきました。これについて直接的なお話というのは、ちょっと今私が直接お話しできることは申し訳ありません、材料としてはないんですけれども。
【知事】
じゃあ、僕からちょっと質問があるんだけど、もし学校現場で、今係争中と言われた同じ現象が起こったとき、愛媛県どうなるのかね。１人ＰＴＡに入っていなかった子どもさんが卒業式に１人いました。コサージュ実費出すからっていったときに、どんな感じになっちゃうのかな。同じことが起こるの。それはＰＴＡのほうの問題にはなるんだけどね。
（参加者）
その質問を受けたＰＴＡが実費をいただければそのとおりにしますよっていう答えを出せばいいんだけど、多分、この係争裁判の場合は多分ＰＴＡと親御さんとの間に確執があったからそうなったんじゃないかと思うんです。
（中予教育事務所長）
ＰＴＡの規定の中に支払う、支払わない、そういうようなことまで細かく明記されているのはなかなか見ることはないと思いますので、そのＰＴＡの組織の中での、その集団の中での判断に至ったんではないかと思います。
（参加者）
ですから、私はこれを思うのは、もし最初からコサージュがいわゆる学校の予算の中に組み込まれていれば、もともとこういうことはなかったんかなとか思ったりするわけなんですよ。だから、２つの問題があるんです。ＰＴＡに入らないっていう親御さんがいた場合にどうするんかっていうのと、いわゆるさっきコサージュやないですけど、ＰＴＡが何でもかんでも出すようにし

て、学校がその部分にＰＴＡに予算的なものをおんぶしていたときに、こういう問題が起きちゃうんじゃないかなっていうところもあるわけです。

【知事】

まあ、その辺は本当微妙な問題で、それは何もかもただのほうがみんな喜ぶんですが、そうはいってもこれ皆さんの集めた税金で公費っていうのは出しますんで、そのあたりどの分野でどういうふうに負担と公費を合致させていくかっていうのは永遠の課題だと思うんですね。多分正解はないんですよ。だから、やっぱりこれはもうこういう問題が起こったときに、それぞれの学校、学校というのはかなり自由に話し合える、例えば、市町なんか県はほとんど口出してないですから市町単位でやりますんで、そういうときに議論をするっていうふうなことでやるしかないのかなというふうに思います。

もう１つは学校現場、これは別に学校のＰＴＡの問題だけではなくて、例えば、行政やってますと一番困ってるのは町内会ですよね。町内会も例えば広報を配るためにいろんな経費も掛かるときもあれば、町内のいろんな行事、それはもう文化祭とか運動会もあるんでしょうけども、一番大事なのは防災関係とかね、そういうものにもいろんな共有するべき課題があるときに、いやそんなの関係ないよっていうことで、なかなか参加してくれない方も特に松山は多いですから、これはもういっつも地道に言うしかないんですよね。学校の場合だったら給食費の問題もありますし、昔はあんまりああいうこういう問題は起こらなかったんですけども、やっぱり個人の主張が強くなり、権利というのが非常に声高に叫ばれるようになってからは価値観が変わってきてるので、そういう意味では例えば、これ全国的に同じ問題が起こってると思うので、じゃあ、ＰＴＡの全国で同じ問題起こってるんだったら、こういう費用については公費で出すべきだってのが国で議論されて、じゃあ、皆さんその分税金は上げさせていただきたいっていうところまでいけば成熟した社会になるのかなというふうに思いますので、公費が全員の国民の税金で成り立ってるというところも、そこに入れていただけると、もう少し冷静な議論ができるんじゃないかなというふうには思いますね。